―石碑が語る新津の歴史―
神風特別攻撃隊兵士の墓

板橋育夫

わたしが住む町内の観音寺の墓地に、神風特攻隊兵士の墓がある。いつか、この墓にまつわる日本の歴史を掘り起こしてみたいと思っていた。7月の参議院選挙が終わった直後から、時間が取れそうなので、本格的に調べに入った。

6月18日、山形沖地震が起きた。余震が起きている最中に墓地に立ち入ることには躊躇があったが、墓石に刻まれた文字を読み取るためには仕方がない。短時間で済ますために、写真撮影を試みた。光線の具合だったり、石碑の風化の進み具合でよく読み取れなかった。何回か通ってようやく刻文を書きとることができた。

1　墓に刻まれた文

（1）正面の刻文

故海軍少尉　勲四等功四級

山田　眞　之墓

（2）右側面の刻文

「神風特別攻撃隊第三護皇白鷺隊トシテ昭和廿年四月十六日勇躍出撃熾烈ナル防禦砲火並ニ跳梁スル敵戦闘機群ノ遼撃妨害ヲ排シツツ沖縄本島周辺ニ蟠踞セル敵船群ニ対シテ必死必中ノ体当リ攻撃ヲ決行シ克ク其精華ヲ発揚シテ悠久ノ大義ニ殉ス忠烈萬世ニ燦タリ

右全軍ニ布告ス　昭和廿年八月六日

聯合艦隊司令長官　小沢　治三郎」

（3）左側面の刻文

「父　山田眞臣之建　昭和三十六年　四月十六日」

2　山田少尉の記録を求めて

山田少尉の記録を求めて新津図書館に出かけた。特攻隊に関する書籍を6冊ほど紹介された。その中の1冊に、その名を見つけた。1945（昭和20）年4月16日、菊水作戦第3次攻撃隊の一員として参加していた。書籍からはそれ以上のことは分からなかった。

さらなる情報を求めて、鹿児島県にある知覧平和会館に電話で問い合わせた。十分ほどして、「山田眞さんの資料はあります。詳しいことは自衛隊鹿屋航空基地にある資料館に問い合わせてください」とのことだった。

そこで、同資料館に、「私が住む町内に、神風特攻隊兵士・山田眞さんの墓がありますが、詳しいことは何もわかりません。そちらに資料は残っているのでしょうか」と、問い合わせた。しばらくして、資料はあります。個人情報が含まれていますので、遺族の皆様の了解を得たうえで活用ください。地元の方が、若くして戦死した山田さんに関心を持ち、調べてくださることはありがたいことですし、何より山田さん本人が喜ばれるのではないでしょうか」との返事だった。資料館から次のものがＦＡＸで送られてきた。

山田　眞（やまだ　まこと）

作戦方面	菊水三号作戦	布告番号	144
出撃部隊名	神風特別攻撃隊 第三護皇白鷺隊	出撃日時	20.04.16 06:00
階級	一飛曹	戦死日	20.04.16
搭乗機　機数	97 艦攻、2	生年月日	大正 12 年
年齢	22 歳	出身期別	予科練 15 期
出撃基地	串良	所属部隊	姫路海軍航空隊
出身県	新潟県	戦死場所	嘉手納沖

3　この資料から判明したこと

◎出身地　新潟県新津市山谷町

◎戦死時年齢　22歳

◎作戦名　菊水3号作戦

◎出撃部隊名　神風特別攻撃隊第三護皇白鷺隊
◎出撃日時　昭和２０年４月16日６時
◎搭乗機　97式　艦上攻撃機
◎３人同乗　パイロットとして出撃
◎予科練　15期出身

９７式艦上攻撃機３人乗り
（山田少尉が機乗した同型機）

4　観音寺住職に協力を求める

ご遺族の方が秋葉区にいるのであれば、お会いして話を聞きたいと思った。観音寺住職にいきさつを話して協力を求めた。遺族の方と話していただいた。その方が、戦後生まれだったので、山田少尉の資料をこれ以上、手に入れることはできなかった。

5　特攻作戦はいつ、どのように決定されたのか

特攻作戦はあまりにも非情である。これまでも、戦闘の最中に局地的に部分的に類似したことはあっただろう。しかし、敗戦まぎわの「日本の特攻作戦」は、それらとは異質のものである。大日本帝国が、「国家の意思」として「作戦を企画・策定」し、「陸空軍の戦力をすべて注ぎ込む」という「非常手段」によって、「戦争を遂行」しようとした点だ。

１９４５(昭和20)年１月19日、陸海軍大本営は、「帝国陸海軍作戦計画大綱」を決定し、翌20日、大本営総長が作戦計画大綱を天皇に奏上、裁可を得た。この決定こそが、その後の特攻作戦の命令の根拠となった。内容の中心点は、「皇土、特に帝国本土を確保する。そのために、南千島、小笠原諸島、沖縄本島以南……については、極力敵の出血消耗を計る」ものとする。大綱の要旨は、次の通りである。

① 本土の外郭地帯の縦深作戦によって、敵に出血を強要しつつ持久戦に持ち込み、本土決戦準備のための時間稼ぎをする。
② 戦法として、奇襲特攻を採用する。

6　特攻「天号作戦」の命令下る陸軍大本営参謀本部は、これに基づき、「侵攻する敵、特に主敵米軍を撃破する」方針を全軍に明示して、実行に移した

２月６日、陸軍「天号航空作戦」と命名、同月15日、

第32軍戦闘指令第1号には、撃敵合言葉として「一機一戦艦、一艇一船、一人十殺一戦車」のスローガンが示された。4月3日、第五航空艦隊長官・宇垣纏（まとめ）中将は、菊水一号作戦発動した。

7　天1号作戦……戦艦大和による水上特攻

1945（昭和20）年4月6日、山口県徳山沖から、戦艦大和、軽巡洋艦（矢矧、駆逐艦・雪風、磯風、浜風）等10艦が出撃した。暗号電報を傍受され解読されていた大和は、米軍の待ち伏せ攻撃を受け、4月7日には沈没した。沖縄の浅瀬に乗り上げ、巨砲を撃って、撃って、撃ちまくる予定だったが、何もすることなく水没した。乗組員、3、332名。生存者は、わずか276名だった。全長263m、排水量6万9000tの世界最大の戦艦大和は、鹿児島県坊の岬沖、345mの海底に沈んだ。

陸海軍大本営参謀本部の計画が、いかに杜撰で、独りよがりのものであったかは、戦艦大和の特攻作戦の結果を見れば明らかである。何ら任務を果たすことなく戦死させられた乗組員たちの無念はいかばかりであっただろう。

副電測士として大和に乗り込んだ吉田満（海軍少尉、学徒動員）は、数少ない生き残りの一人だった。吉田の代表作となった「戦艦大和ノ最期」で「コレヨリ敵地ニ入ル　右ニ九州　左ニ四国　シカモ制海制空権ヲ占メラル」「死ハスデニ間近シ　遮ルモノナシ　死ニ面接セヨ　死コソ真実ニ堪ウルモノ　コノ時ヲ逸シテ　己ガ半生　二十二年ノ生涯ヲ総決算スベキ折ナシ」、「徳之島ノ北西洋上、"大和"轟沈シテ巨体四裂ス今ナオ埋没スル三千の骸　彼ラ終焉ノ胸中果シテ如何」と書き残している。

吉田　満

8　菊水特攻作戦発動

4月1日、大本営は「陸海軍全機特攻化」を決定し、

4月6日、菊水1号作戦として、海軍作戦機、391機、陸軍133機が 九州と台湾の航空基地から飛び立った。

4月16日、海軍としては最大規模の菊水3号作戦が行われた。海軍作戦機415機、陸軍92機が投入された。

山田眞少尉の乗った97式艦上攻撃機（3人乗り）も出撃し、そのまま帰らなかった。

菊水1号～10号作戦で、海軍2、045名、陸軍1、022名戦死者を出した。

9　特攻作戦で、戦局は大きく変わったのか

3月10日、東京大空襲。3月17日、硫黄島玉砕。5月1日、ドイツ降伏。6月20日、沖縄守備軍最高司令官・牛島満が摩文仁で自決。沖縄が完全に占領された。

1月19日、大本営が決定した、「帝国陸海軍作戦計画大綱」による「天号作戦」では、戦局を大きく変えることはできなかった。同じころ（2月4日）開かれた連合国側の指導者（チャーチル、ルーズベルト、スターリン）は、ドイツ、日本の敗戦は時間の問題と確信し、その後の世界のあり様をクリミヤ半島のヤルタで話し合っていた。

戦争指導の根本方針策定し一元的な指導を行うはずだった日本の最高戦争指導会議は機能せず、彼我の軍事的力の現状把握 が正確になされていなかった。6月9日に発せられた昭和天皇の勅語には、生死の瀬戸際にいる多くの国民・兵士への思いがないのは驚くばかりだ。

> 「世界ノ大局急變シ、敵ノ侵寇亦倍々猖獗ヲ極ム。正ニ敵國ノ非望ヲ粉砕シテ征戰ノ目的ヲ達成シ、以テ國體ノ精華ヲ發揮スヘキノ秋ナリ。朕ハ爾有衆ノ忠誠武勇ニ信倚シ、共ニ艱苦ヲ分チ、以テ祖宗ノ遺業ヲ恢弘セムコトヲ庶幾フ。」（猖獗（しょうけつ））とは→猛威を振るう）

日本の指導部は、ドイツが降伏したのを知って、「世界ノ対局急變シ敵ノ侵寇亦倍々猖獗ヲ極ム」と言いながら、それでもなお「敵國ノ非望ヲ粉砕シテ征戰ノ目的ヲ達成シ」と述べていることに驚くほかはない。

10　日本の指導部は戦争の劣勢をいつ認識したのか

政府の中枢にいて、真実を知っていた軍人、官僚、

政治家は、1943（昭和18）年当初に、日本の劣勢を知っていた。その例を挙げてみよう。

（1）東条内閣打倒工作始まる

1943（昭和18）年、正月ころから、ミッドウエー海戦の大敗北、ガダルカナル島の撤退・敗北を知った高級官僚や和平派の重臣（若槻礼次郎、近衛文麿、平沼騏一郎など）は、ひそかに東条内閣打倒運動を始めた。

（2）連合艦隊司令長官・古賀峰一訓示

1943（昭和18）年4月18日、山本五十六連合艦隊司令長官は、アメリカの戦闘機によって撃墜され、戦死した。後任として着任した古賀峰一は戦艦武蔵に幹部を集めて、「決戦兵力を多数失い、勝算は著しく低下、三分の勝ち目もない。日米の兵力の懸隔は大きく、海軍に関する限り、玉砕戦法しかない」と訓示をした（5月8日）。海軍のトップにいた指導者たちは、この時点で日本の敗戦を予測していた。

（3）近衛文麿上奏文提出

1945（昭和20）年2月、近衛文麿は、早期に和平工作を進めるように昭和天皇に上奏文を呈上した。この中で「敗戦は遺憾ながら最早必至なりと存じ候」と、戦争の終結を提言した。これに対して、天皇は「もう一度戦果をあげてからでないと、なかなか話は難しいと思う」と上奏文を却下した。

11　改めて山田眞少尉の特攻攻撃の是非を問いたい

保坂正康は、「昭和史忘れ得ぬ証言者たち」で、海軍航空部隊指揮官だった美濃部正を挙げている。1945（昭和20）年2月、海軍の木更津航空基地で幹部80人が出席して、連合艦隊の作戦会議を開いた。「次期沖縄決戦では全員特攻編成を行う」という提案に対して、美濃部正は、「私には『死』しかない命令を下すことはできない」と公然と反対した。首席参謀は「必死尽忠の士が進撃するとき、何者がこれをさえぎるのか」と激怒し、二人の間で激しいやり取りがあったという。「司令などの指揮官から率先して突っ込んでいくなら、私は反対できないが、一億玉砕の名のもとに、若いパイロットに命を賭して体当たり攻撃にいけと命じるのはあまりにも残酷ではないですか」と、「抗命罪」覚悟で反論したという。

本土決戦のための「時間稼ぎ」、「捨て石」とされた天号作戦は、本当に愚かな作戦だった。山田少尉の石碑に「体当リ攻撃ヲ決行シ克ク其精華ヲ発揚シテ悠久ノ大義ニ殉ス忠烈萬世ニ燦タリ」と刻まれているが、「悠久ノ大義」が本当は「本土決戦の時間稼ぎ」のためだったといわれてはたまらない。戦争の情勢がこれほど悪化するまで和平工作を進めなかった、当時の戦争指導部の無能こそが大問題なのである。

山田少尉の墓は、1960（昭和36）年4月16日に建てられた。17回忌の命日であった。父が子の墓を建てる、これほど悲しいことはない。二度と再び日本は戦争をしてはならない。

《付記》2019年11月17日、西蒲の「憲法カフェ」の講師に呼ばれ、神風特攻隊兵士の墓について話をした。出席していた亀山和子さんが次の短歌を詠んで投稿してくれた。（短詩形文学 2019年12月号）

—「神風特攻隊兵士の墓」その父十七回忌に建立す
—わが孫と同年代の二十二歳海底に死す青春のなく

和子さんの長兄・若月又次郎さんは神風特攻隊兵士だった。

若月さんの歌集「飛行兵の歌」の中で次の短歌を残している。

—声高の曾祖母なれども発つ朝の声は小さしまめで戻れと
—着任の申告の後に渡されしは「遺髪・氏名」のハトロン封筒
—玉音という放送のありわが雷撃特攻取りやめとなる

山田眞も若月又次郎も大正12年生まれ22歳だった。生と死はほんの紙一重の差だった。

若月又次郎　歌集「飛行兵の歌」

（いたばし　いくお　秋葉区9条の会）